

本のレポート

「知られざるフランス革命 ヴァレンヌ逃亡 マリー・アントワネット運命の24時間」

著者：中野京子 （朝日新聞出版）

180781222 山名里奈

ヴァレンヌ事件とは、革命の怒涛の波に危機感を覚えたフランス国王ルイ16世と王妃マリー・アントワネットが1791年、スウェーデン貴族フェルゼンに助けられ、チュイルリー宮殿から逃亡するが、目的地まであとわずかの僻村ヴァレンヌで見破られ、屈辱の逮捕、パリへ護送という最悪の結末を迎えた事件である。

1810年6月20日、フェルゼンは、スウェーデン国王カール13世の命により、世継ぎの王太子カール・アウグストの葬儀責任者を任されていた。民衆は反貴族派に煽られ、王太子を暗殺したのがフェルゼンだと信じ込んでいる。フェルゼンは王太子の死に関わっていなかったが、脅迫状を受け取るほど憎まれていたのである。しかし、6月20日は特別な日であるため、殺されても国葬に出ると決めていた。フェルゼンは19年前のこの日、ルイ16世一家をパリから遠ざけたのだが、途中でルイからお役御免を言い渡された。その後、国王一家がパリへ連れ戻されたことを知り、なぜ逆らってでも同行しなかったのかと、とても後悔した。また、フェルゼンはマリー・アントワネットに恋をしていたため、なぜ彼女のために死ななかったのだろうと、自分を責めた。そしてこの日は彼にとって畏敬の日となったのである。フェルゼンの偽装馬車が軍列の前を進んだとき、石が次々飛び交った。フェルゼンは、人々に殴られ、衣服を引き裂かれる中、マリー・アントワネットのために死ぬのだと考えていたかもしれない。

変装してパリ脱出という計画は、当初6月6日を予定していた。しかし、ルイ16世の意向により3度も予定が変更された。フェルゼンは予定通りの決行を強く迫ったが、無駄であった。逃亡のチャンスがあったときでさえ、ルイは迷っているうちにチャンスを逃してしまうほど決断力がなかったのである。さまざまな変更を余儀なくされたが、フェルゼンの練った緻密で大胆な計画はよく考え抜かれたものだった。

6月20日月曜、ついに決行のときが来た。王一家は常と変わりなく、ルーティンをこなしてゆく。そして、衛兵に気づかれないように、子どもたちから順に変装して王室を抜け出した。最後にアントワネットがルイ15世広場で合流し、零時半、全員そろい、出発した。新しい馬車に乗り換える時、時間がかかってしまったが、パリから、チュイルリー宮殿から脱出することに成功した。手際よくすべての馬替えが終了し、陽気な気分できざ出発という間際、フェルゼンは車内のルイに呼ばれて窓際へ近づいた。すると王はまるで何でもないことのように、こう言うのだった、貴殿はここからはひとりでベルギーへ向かうがよい。青天の霹靂とはこのことだ。フェルゼンは努めて冷静に、王への説得を試みたがルイは不快を示した。フェルゼンはこのときのことを「王は望まなかった」とのみ記している。そこに込められた、怒りと悔いが彼を苦しめたのだ。

あと1時間45分もあれば、ショワズールに指揮された連隊の腕の中へ飛び込んでゆける

だろうと、アントワネットは安心した。だがそれは最後の笑いとなった。ルイもアントワネットもフェルゼンから念押しされたにもかかわらず、大貴族でありながら市民側の国民衛兵隊指揮官になったラファイエットのことを甘くみており、パリからの追っ手に接近される可能性については全く頭になかった。

ヴァレンヌで馬車から降ろされた一行は、不安と恐怖の中、助役ソースの二階建ての家へ行くこととなった。そこに訪れたジャック・デステという男が変装したルイの前で跪き、「ああ、陛下！」と呼んだ。このとき王の計画はぶち壊されたのだ。サント・ムヌーの宿駅長ドルーエが、王は亡命するつもりだと叫んでいたときには半信半疑の者が多かったが、今やパリの国民議会から追っ手が逮捕状を持ってやって来た。「パリへ、パリへ！」大合唱が自然発生的に生まれ、国王が食事をしている部屋の窓ガラスを振動させた。王は平然と食べ続けたが、皿には何も残っていない。ソース夫人が空の食器をすぐ下げてしまい、引き延ばしのための食事は終了する。ドルーエなくしてヴァレンヌ事件が歴史に刻まれることはなかった。腐った王政に対する名もない民衆側の勝利となった。

マリー・アントワネットが現代に至るまで女性たちを惹きつける理由の一つは、フェルゼンに愛されたからであると言っても過言ではない。「浪費家で遊び好きの愚かな女にすぎない」のに、フェルゼンのような、教養があり、優れた軍指揮官で、勇気と実行力に富み、政治能力が高く、数多くの愛人を持つ男性の心を強く繋ぎとめたのはなぜだろうか。フェルゼンとアントワネットが守ろうとしたものの中には、絶対王政だけに可能な「美」もあった。ガラス細工のような脆さと儂さをたたえた高度な女性美は善意を超え、永遠である。どこか哀愁をたたえ、厳しい現実と無縁の優美を誇る、それはまさにアントワネットが体現し、フェルゼンが恋してやまなかった美の極致であった。